

キリストの望みを現世的なものにしてしまふならば、それはむなしいことです。結局は死によつて無になるからです。それが人生の結論になるのです。復活を信じることはこの結論が変わることです。生きる時には主と共に生き、死にあつても主の死に結ばれ、主が復活されたので、自分もその復活に与る希望に生涯を閉じることができるようです。あの人は主と共に生き、主と共に死に、今も主の御許にある、それがわたしたちの人生の結論になるのです。

主の復活を理解するには、人の側から推し量ることができません。自分の欲しい救いから、主イエスの復活にたどり着くことはできません。救いは神が主体になつて与えてくださるものです。ヨハネによる福音書に「神はその独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」とありますが、こういう、神の愛の一連の出来事の上に主の復活があるので。

復活の主との出会いを知ることは、聖書が持つている神の御計画を受け止めることになりません。聖書は信仰を持つたものたちの生き方を教えます。救われたものたちの歴史です。それは、同時に罪人たちの歴史でもあります。聖書の中には誰もが立派だといふような人はあまり登場しません。弟子たちでさえ、主の十字架から逃げ出し、ペトロは三度も知らないといつたのです。パウロも教会の迫害者でした。聖書の人々も私たちと同じく弱さや破れを抱えた罪人たちです。それが復活の主イエスと出会うことによつて救われてきたのです。

復活の主に出会う信仰は何か特別な体験によることではありません。備えられた恵みを受け入れることによるものです。聖書はこの恵みを知らせるものです。

人は福音の信仰によつて、復活の主に触れてきたのです。そこにはイエス・キリストの復活という福音の水源からの流れがあります。復活の主は生きた命の水の尽きない流れを生み出してきました。教会が受けついできたのはこの脈々とした流れになります。

主イエスの生きた姿が宣教によつて今も実現しているのが教会の姿です。救われたものが集い、加えられ、生活し、生涯を全うします。教会は福音が生活になつていくところなのです。

神が主の復活の福音をこのように人から人へと受け継がれるようにされたのは、福音がそれを受け入れた人々を救ってきたからです。福音は人を救いながら、わたしたちのところまで至つたのです。罪と死からの救いが途切れることがなかつたので、今も教会が繋がつており、新たに救われ洗礼を受けて加えられる人が与えられている。このことが福音の確かさを証明しているのです。

福音が宣べ伝えられ、それを聞き、そして信じる。それが共にある神の恵みです。それがしつかりした生活を形作ります。この不安な時代にわたしたちは確かな生活のよりどころを持つていくのです。この確かさを味わい、希望をもって生活を重ねることができるようになります。

(四月九日 イースター礼拝)

## 二月講壇一覽

第一主日(二月五日) 公同礼拝

「つまらない言葉の責任」 高橋和人牧師

エレミヤ 二三・一六〜一七

マタイ 一二・三三〜三七

第二主日(二月二日) 公同礼拝

「献金の信仰」 姜 偃米牧師

詩編 二九・一b〜二

コリント一 一六・一〜四

第三主日(二月九日) 公同礼拝

「ヨナにまざるもの」 高橋和人牧師

ヨナ 三・一〜一〇

マタイ 一二・三八〜四二

第四主日(二月二六日) 公同礼拝

「救いの後の生き方」 高橋和人牧師

エレミヤ 四・一〜二

マタイ 一二・四三〜四五